

未来へ つなぐ



会場では、機織のデモンストレーションも披露された



本庄織物の着物を着てランウェイを歩くモデルたち

Interview 六高祭を終えて



六高祭実行委員長
本庄第一高校3年
飯塚菜々子さん

今回、ファッションショーの開催を通して、自分自身「バッグや名刺入れなど、こんなところにも使われているんだな」という気付きがありました。これから先、本庄織物が、高校生の日常使いできる小物や、赤ちゃんのグッズなど、より幅広い世代が使えるものになっていくといいなと思います。今回の六高祭は、本庄の伝統を広く知ってもらうきっかけになったと思います。今後も六高祭で伝統文化を未来につなげる取り組みが続くといいなと思います。

高校生たちによる六高祭 伝統文化に新しい風を 本庄織物を若者世代へ

本庄織物で ファッションショーを開催

市内6つの高校の生徒が集い、日頃の活動の成果を発表する合同文化祭「六高祭」は、今年で4回目を迎えました。企画・運営を高校生自らが担い、地域に元気を届けるイベントです。

イベントの目的の一つは「本庄の魅力を発信すること」。ただの魅力発信ではなく、自分たちの同世代にも魅力が届くようアレンジして、伝統と未来をつなぐアプローチをしています。

今回、新たな取り組みとして、本庄の織物文化を伝えるファッションショー「ORIMONOGATARI」を開催。伝統的な着物や、現在のニーズに合わせて進化させた小物やバッグを身に付け、高

校生モデルがランウェイを歩きました。この試みは、高校生たちの「本庄の地域資源をもっと知ってほしい」という思いから実現したものです。衣装提供、シナリオ作成、着付けやパフォーマンスなど、地元織物業界の全面的な協力のもと、本庄の織物文化の魅力を来場者へアピールしました。

11月6日、市役所で行われた六高祭の最終会議。市長との意見交換では、実行委員の生徒たちから次回の六高祭に向けた課題が挙げられました。その中には「六高祭で伝統工芸を発表したことは良かったと思う。ただ、それだけでなく今後どうつなげていくかを考える必要がある」といった意見もあり、そこには高校生が伝統文化を自分事として考える姿がありました。

今に継がれる伝統工芸



本庄織物

養蚕が盛んだった本庄では、絹を使った織物の製造も盛んでした。名産の本庄織物（本庄絁）は、隣の伊勢崎の賃織（糸と織機を貸与し、製織させてその加工賃を支払うもの）として始まったもの。当時は、本庄で織ったものも伊勢崎銘仙の名で販売されていたそうです。埼玉県伝統工芸品にも指定されている本庄織物ですが、時代の流れもあり、現在では市内の「黒澤織物」「古澤織物」の2軒のみが、今もその伝統を受け継いで作り続けています。



黒澤織物（山王堂 208）
反町眞弓さん

黒澤織物は、伊勢崎の織物会社に勤めていた両親が昭和55年に設立しました。本庄織物の技法は、機屋によってそれぞれ特徴が異なります。現在、私は伝統工芸士の父母のもと、我が家の染織を学んでいるところです。原料の絹

古澤織物は、祖父母の代から始まり100年位になります。かつては着物に使う反物の製造が中心でしたが、時代の変化に合わせて、現在はネクタイやストールなども作っています。織物はどれも一点ものです。最近で



古澤織物（小島 4-2-21）
古澤優泰さん
古澤あぐりさん

は、NHKのドラマで古澤織物の反物と着物が使用されました。四角の柄が特徴的な縞模様なので、お客さんから「あれは古澤織物さんの着物？」と声を掛けてもらうこともありました。お客さんに会って、喜んでもらえることが何よりです。「一生使えますね」と言ってもらえると嬉しいですね。

今はお嫁さんの力を借りて、名刺入れやバッグなども作っています。「本庄ならではのお土産を渡したい」とお求めになるお客さんもいらっしやいます。形にこだわらず、大切にしてもらえ

糸にこだわり手染めをし、柄・色・デザインを工夫し多くの方に好まれるような織物ができるように修業中です。本庄織り独特の括り染め絁糸を使い、一織り一織り心を込めて織っています。両親から教えていただいた伝統の本庄の織りを大切にしながら、その中に「自分の色」を加えて表現していきたいと思っています。

埼玉伝統工芸会館（比企郡小川町小川 1220）

県内の伝統工芸品を展示・販売している埼玉伝統工芸会館では、本庄織物製品も取り扱っており、2月には機織の実演も予定している。

- 開館時間 午前9時30分～午後5時
- 休館日 月曜（この日が祝日の場合は開館）・祝日の翌日（この日が土・日・祝日の場合開館）・12月29日～翌年1月3日
- 入館料 大人300円 小人150円

